

晩清における「西学中源」説と「中体西用」論の盛衰について

王 揚宗

内容提要：“西学中源”説和“中体西用”論萌生于西方学术输入中国的明清之际。由于康熙帝的提倡，“西学中源”説曾经一度流行。晚清西方近代科学再次传入中国，两説也再次盛行。当时提倡西学者，几乎无不论“中体西用”，道“西学中源”，可见在一定程度上，它们是有助于西学输入中国的。但是，随着西学输入的进展和时代的进步，两説的弊端也日益暴露。1890年前后，首先出现了対“西学中源”説的批评，但也引起了卫道者的强烈反弹，王仁俊、刘岳云等捍卫此説，撰成『格致古微』和『格物中法』。张之洞的『劝学篇』对“西学中源”説进行了改造，并对“中体西用”論加以系统阐述，是一个折衷新旧的救时方案。然而随着社会的剧烈变革，两説都在20世纪初叶为时代所迅速抛弃。“西学中源”説和“中体西用”論的进步性和局限性交相为用，其演变和消长反映了中国这个文明古国吸收外来文化的独特途径。

明末清初の西洋学問の伝来から、清末に中国に近代科学が導入されるまでの300年余り、「中学」と「洋学」の関係をめぐって、いくつかの観点が流行した。中でもっとも有名なものは、まず「洋学の源流は中国にある」という「西学中源」説であり、続いて「中学は体となし、洋学は用となす」論である。2つの観点は、いずれも清末に唱え始めたものではないが、清末に特に流行した。この事実に対して、数十年来、学术界では多くの詳細な研究があった¹。しかし、清代の思想、学術、ひいては政治への両説の影響については、研究者の間では意見が大きく分かれている。また両説のマイナス的な作用が強調し過ぎた感もある。同時に、両説は密接に関連し合ったものであるが、これまでの研究者のほとんどは分けて論述している²。そこで、本稿では両説の関係及び、その清末における盛衰と変遷について、新しい材料を補いながら私見を述べようとする。よって中国への西洋科学導入の過程における、東西文化、観念の衝突と融合を考察する。

—
17世紀初頭、西洋の宗教と科学が中国に伝来した当初、宗教と科学に関して西洋と中国の

間に大きな相違が存在していた。両者の宗教と学術の交流のために、イエズス会士マテオ・リッチらと西洋の科学を愛好する中国人学者徐光啓、李之藻らは、キリスト教を用いて儒教を補う理論をうち出した。彼らは、キリスト教は「今の儒学」と異なるが、上古の儒学とは暗黙裏に符合していると言っている³。彼らは中国人の古きを尊ぶ気持ちをうまく利用してキリスト教の教義を広めようとした。「西学中源」説もまたこういった布教戦略の1つであり、中西間の学術の溝を無くし、洋学導入への抵抗を和らげるためであった⁴。

清の初期、満州族の統治者が異民族として中原に入り支配者となって、また西洋暦法も採用した。民族間の対立に加えて、中西学術の争いも絡んでいた。前代の学者、例えば王錫闡らが西洋の学問を低く評価し、西洋の天文学、数学はただ「中国の余りもの」を盗んだにすぎないと考えていた。西洋の天文学、数学を取り入れる一方「外国を用いて中華を変える」という嫌疑も避けた康熙帝は晩年になれば、中西間の学術の衝突を和らげるために「西学中源」説を自ら提唱した。特に彼が南方巡回の時、暦学算数の大学者梅文鼎に会い、梅氏に『暦学疑問歩補』という書を書かせ、「西学中源」説についてもっぱら論証させた。その後「西学中源」説は、清政府の学術主張となり、覆すことのできない学説として瞬く間に広がっていった。清代中期、この学説は『四庫全書総目』に掲載され、加えて阮元ら有名な学者の宣伝によって、「西学中源」説は更に世の中に浸透した。この学説に反対する学者もいたが（例えば、安清翹の『数学五書』）、大勢は動かなかった。

アヘン戦争後、西洋の科学が再び伝わってきたことによって、中国の学術と西洋科学の関係はまた論争の対象となった。「西学中源」説は康熙帝が提唱した学説なので、一部の人によって持ち出されたのも不思議ではない。1860年代の初め、「自強運動」が起こり、西洋の科学技術を導入しようとした多くの人々は、この学説で保守派の反対を封じようとした。例えば、1868年同文館に天算館を設立することをめぐる論争の中で、奕訢はこの学説を利用して、倭仁らに反撃した。倭仁は、西洋を学ぶのは「中国の伝統を捨てて西洋に従う」とことだと奕訢を攻撃した。奕訢は、西洋の学問は元々中国に基づいたもので、中国西洋は同じルーツであって、西法とは中法のことである。ただ中国がその方法を創り、西洋人が新たに発揚しただけである。従って洋学を学ぶことは、中国の伝統に背くものではないと説明した。奕訢以前に、李鴻章がすでに「西学中源」説を用いて西洋の機器製造を学ぶことは中国の伝統に合致していることを論証した⁵。自強運動の時代に、西洋の科学技術を提唱した者は「西学中源」を説かなかったものはいない。朝廷の重臣から民間の学者まで、例えば曾國藩、李鴻章、奕訢、劉坤一、張之洞、薛福成、黃遵憲、王韜、馮桂芬、鄭観応らは異口同音に「西学中源」説を吹聴した⁶。このことから「西学中源」説は歴史的事実とは一致していないが、一定の程度において中西の学術交流と西洋の学術知識の導入の助けとなったことが分かる。

「西学中源」と相呼応して、もう1つ中西学術に関する視点も非常に流行した。これはつ

まり「中学は体となし、洋学は用となす」という学説である。この説の初期の形態も明末清初に創られた⁷。明末の暦改革の時に徐光啓は暦改革における中西暦学の融合を論じた際「西洋の材料を溶かし、中国の枠に入れる」と主張した⁸。康熙末年、『数理精蘊』『曆象考成』など科学書が編纂されたとき、康熙帝も、編纂に当たって「規模は古いものを残すがよく、数目は今に準ずるがよろしい」と指示した⁹。これらの考え方は、後の「中体西用」説の實質と異なるものではない。また、まさにこのような思想の下で、西洋の天文学と数学はようやく部分的ではあるが、中国に導入された。しかし同時に、このような思想はまた西洋学術に対する中国人の理解と受容を制限したのもであった。なぜならば、中国学術を正統とみなしているため、洋学の導入は必ず中国学問に従わなくてはならず、いつも技術的なものと枝葉的なものでなければならなかった。その結果、洋学導入は中国の学術を根本から変えることが難しかった。この意味において、明清の西洋科学の導入は中国の伝統科学の発展方向を変えることがなかったと言える。

清末、ちょうど西洋の科学技術が再び中国に伝来した時、「西学中源」説が復活すると同時に、「中体西用」説も再び主張され、また洋学の浸透にしたがって次第に「完全」なものとなった。

周知の通り、清末の「中体西用」説に関する比較的早い時期の論述は、1861年馮桂芬が『校邠廬抗議』の中で述べた「中国の倫常名教を根本とし、諸国の富強の術を持って補充する」という言葉である¹⁰。馮桂芬の意図するところは、この説で「洋学を取り入れる」「西洋識の機械をつくる」という主張を宣伝することであった。その後、始まった洋務運動はつまりこのような主張の実践である。1860年代から1980年代まで李鴻章、郭嵩燾、薛福成、王韜、鄭観応ら自強運動の指導者や参加者、支持者は、表現こそ異なるが、實質は馮桂芬の「中本西補論」と同じ言論を発表している¹¹。例えば薛福成は、『籌洋芻議』（1885）の中で、「すでに敵国に包囲されている以上、富強の術は廃止することはできない。……今西洋人の製造の技術を確実に取り入れ、我が堯舜禹湯文武周孔の道を守れば、たとえ西洋人でも中華を蔑視することができまい」と言っている。それだけではなく彼はまた「我々の堯舜禹湯文武周孔が蘇っても、同じことをするであろう。その道も必ず広く四方に行き渡るであろう。これはつまり中国を用いて西洋を変えるのである」と考えている¹²。これは西洋の「製造の学」は「用夷變夏」ではないばかりか、「用夏變夷」の効果でさえも得ることができると明言することになる。言うまでもなく、これは魏源の「夷の優れた技術を手本とし西洋を制す」よりさらに優れた議論であった。

「中体西用」説は、西洋を学ぶことと王権道徳を維持することとの関係について1つの答えを出したので、「夷の優れた技術を手本とし西洋を制す」の論よりもっと受け入れられやすい。19世紀後半、西洋の科学技術を好む官吏、紳士の幅広い賛同を得て、洋学を取り入れ

る有力な思想的武器となった。戊戌維新の時期に「中体西用」の説は、上は光緒帝と維新事業に協力する大臣に至り、下は地方の革新的新聞、例えば『湘学報』から宣教師が出版した『万国広報』までが宣伝する学説となった。19世紀末の中国では洋学を嫌う保守派以外、洋務の重臣にせよ、維新派の人物にせよ、洋学の導入に賛成する者はみな「中学は体となし、洋学は用となす」を主張した。このことから、この説は洋学の導入に大いに役立ったことがわかる。

二

しかしながら、「西学中源」説が正確に中西科学の歴史的関係を説明していないのと同様に、「中体西用」説も中西科学の現実的な関係を正確に反映していない。これは即ち後に嚴復が「体、用とは同一の事物についてこれを言うものである。…故に中学には中学の体と用があり、洋学には洋学の体と用がある。別々にすれば両立するが、合併するとともに滅びるのである」と批判している¹³。洋学導入の深化と発展にしたがって、洋学の知識は必然的に「中学の体」に抵触し、中学と衝突することになる。例えば、洋学に精通する人材を育成するためには教育制度そのものを革新しなければならないため、科挙に没頭し正道を進めたい多くの人達の利益を脅かすことになる。一方、西洋の学術を学ぶとなると、洋学を学んで中学を落とすということになりやすいため、「中体」に関する教育が不足しがちになる。同治、光緒の時代に起きた、同文館に算学館を設立することに関しての論争やアメリカ留学の学童の強制帰国などの事件は、実質的にはこの種の中西衝突を反映していたのである。更に「中体西用」と「西学中源」の説は、中国における洋学の名実不一致という問題を引き起こした。したがって西洋の科学に対する人々の認識が深くなるに連れ、西洋の科学には本も末もあり、体も用もあることが明らかになった。とりわけ日清戦争後、維新を主張した人々は中国は製造の技術が西洋に及ばないだけでなく、政治制度においてももっと西洋には及ばないということに気づき、洋学導入の範囲を拡大し、制度面でも西洋を学ぶよう求めたとき、中西間の矛盾と衝突は更に激しくなった。学術面におけるこのような衝突の表れは「西学中源」説をめぐる論争であった。

すでに述べたように、自強運動から、「西学中源」説は勢力を取り戻し、多くの洋学を提唱し愛好する者の好んで話すところとなった。しかし、1880年代に入って伝来した洋学がますます多くなり、その歴史的背景も次第に中国人に知られるところとなった。それ故、虚構に基づいた「西学中源」説はますます根拠を失った。同時に保守的な人たちは「西学中源」説をもって洋学の導入を非難した。彼らは、洋学は中学より生じたものである以上、洋学の導入は不必要だと主張した。これはつまり洋学導入の正当性を否定した。したがって中西学術の相互関係を本質の上で正確に認識することは、洋学の提唱者にとって解決しなければな

らない問題となった。

早くも1889年に李鴻章が上海格致書院春季特別作文コンテストクラスのために「中西格致の学異同論」という課題を出題した。参加者鐘天緯と朱澄叙が答案の中で比較的正確に西洋科学の発展史を述べた後、「洋学は本来中国に基づく」という説は信用できないと明言している¹⁴。例えば鐘天緯（署名は「王佐才」）は答案の中で以下のように述べている。

中国の格致の学は……即ち義理の格致で、物理の格致ではない。中国の伝統は道を重んじ、芸を軽んず……諸儒の言を見るにみな格致は義理をもって説をたてたが、今の西洋の学問に及ぶものはない。しかしながら、偶然に一致するはないわけではない。……中西が合うとすれば、それは偶然であって、中西が合わないものは赴く方向が異なるからである。これは中国が古を尊び今をさげすむことによる。よって古人にまったく及ぶことができず、いつも古いしきたりに固執し、融通をきかずことを知らない。西洋人は新しい物を好み古い物を嫌う。学問は進歩し、常に先人に勝ることを求め、実用を追究する。これが中西格致の分かれるところである。

ここでは鐘天緯は中西科学の似たところを「偶然」と考え、「西学中源」説を否定した。彼は中国の歴史には西洋のそれと似ている「格致の学」の存在も認めなかった。

1890年、王韜は彼とワイリー共訳の『西国天学源流』を再版した。この書は元々ワイリーが編集長を務めた雑誌『六合叢談』（1857-1858年）に掲載されていたが、広く知られず、読者も少なかった。再版にあたって、王韜は付記を書いた。付記の中で、王韜は、この書を翻訳し出版した目的は、中国人に西洋天文学の歴史を知ってもらうためだと説明している。こうすれば西洋天文学の源は中国にあるという論調は自ずから滅びることになる。王韜はまた阮元の『畴人伝』を「大を疎かにし、小を覚える、論は詳らかでない、……西洋諸国の天文学はギリシャより始まることを知らない」と批判した¹⁵。

「西学中源」説は、西洋天文学の源は中国にあるという説を拡大解釈してできた学説であったことが知られている。この説の拠り所となる部分が成り立たなければ、「西学中源」説も重要な根拠を失ったことになる。「中国洋学の第一人者」と言われる嚴復は、1895年天津の新聞『直報』に「国を救う結論」を発表し、「近頃、名士をきどる者がいるが、彼らは西洋の諸学を聞いてかすめとっただけで、実際については論議したことはない。にもかかわらず自らを褒め称え、他人を蔑もうとしている。博学ぶりを装っているが、実は古い書物から陳腐な言葉をあさり、洋学はみな中国にすべてあり、西洋に目新しいものなぞない云々という。……とりわけばかげたことは、最近、洋務の概略しか知らない人が書物の中で、西洋はまさに我中国の古代の聖人の余りを盗みとり、絶えず改善したが、中国に返すことにより、

私欲を満たそうとするが、天はそれを許さない云々と放言する。このような吐き気をもよおす論議があることから、中国人の知識の低さがわかる」と憚ることなく批判している¹⁶。嚴復の批判は、現実を無視し、西洋の学問を蔑む目的で「西学中源」説を主張する人にとって、痛烈なものであった。

しかし、旧道德の擁護者たちは傷だらけの「西学中間」説を放棄しようとしなかった。あたかもこの時、清末の「西学中源」説を代表する集大成の著作が2冊出版された。これはつまり王仁俊の『格致古微』と劉岳雲の『格物中法』である。

王仁俊(1866-1914)江蘇吳県人、有名な経学家俞樾の弟子であった。光緒18年(1892)進士になり、張之洞に認められた。『格致古微』の刊行も張之洞の援助を得た。維新改革の機運が日増しに高まっていく1896年に、王氏がこの本を書いた目的は「古籍の機微を表し、洋学の雑多さを暴く。中国と西洋の違いを峻別し、中国と外国の堰を大きくする」(『格致古微』「略例」)にある。彼が「西学中源」説を宣伝する意図は洋学提唱者と明らかに異なり、洋学を抑え、中学を尊ぶことにある。王氏は、中国典籍から500項目以上の資料を集め西洋の天文学、数学、地学、医学、化学、鉱学、力学、熱学、電学、声学、植物学をこじつけている。彼は更に西洋の文字学、絵画、工商、政治、風俗などその源はすべて中国にあるとまで主張した。彼は清代学者、特に洋学を蔑むことを主旨とする学者、例えば梅穀成、錢大聽、阮元、鄒伯奇、王之春らの「西学中源」説に関する様々な言論を集めた。同時に洋学の導入を旨とする「西学中源」説の発言を意図的に避けた。したがって王氏と同じ立場の人たちから「西洋のエッセンスを摘み取り、中国の模範に溶かす」「西洋に溺れた学者を震わす」「特に名教に功績がる」などと褒め称えられた¹⁷。この本が世に出てからすぐ、『格致精華論』と改題され、再版が重ねられた¹⁸。これは維新革新時代の「西学中源」説を反映する代表作と言えよう。

劉岳雲(1849-1917)江蘇宝応人。光緒丙戌(1886)進士となる。農部主事、戸部主事、戸部江西司員外郎などの職を歴任していた。劉氏は、経術に造詣が深く博学で、「およそ訓詁、音声、天算、地図、雑家、技芸を究めていないものはない」¹⁹。『格物中法』12巻は、1870年に執筆され、その後絶えず増加、訂正が加えられた。1880年前後次第に人の知られるところとなり、光緒末年ようやく前六巻が刊行された。劉氏は、中西の天算格致の学に造詣が頗る深く、全く王仁俊の及ぶところでない。したがって彼の『格物中法』は、中国の伝統科学技術資料の発掘と中西の科学技術知識の比較などの面における深さ、広さはすべて『格致古微』を遙かに越えていた。一部の資料と独創的見解は、今日の中国科学技術史を研究する者にとっても参考となることができる。しかし、劉氏が発憤して本書を著す目的は、中法を表彰し、西洋の科学技術と善し悪しを比べ、「申中仰西(漢学を伸ばし西洋を抑える)」ところにある。彼は自序の中で感慨深げに次のように述べている。

明のマカオ通商以来、西洋が機器や玩賞物などの役に立たない技を中国で鼓吹したのは、中国の富に下心があったからに過ぎない。今日に至りそれは益々明らかになる。西洋の技は、一職人することに過ぎず、紳士はそれを問題とせず、官僚、知識人の蔑むところである。言うに足りない。しかしながら、現在その関心を改めようとするならば、中国に元々ある学問に従って書を著すほうがよい。中国の才知は外国の百倍であり、現在はそれをわざわざ捨て去り使わず、他に遠大なものを求めているだけである。……この本によって西洋の技術は元々すべて中国にあったものであり、もしないものであれば中国は初めからやろうとしなかったことを西洋人が小知恵を弄して作ったということを天下に知らしめようとする。

劉氏は列強への恨みを洋学への深い恨みに変えた。文章には「祖先は金持ちだった」という阿 Q 式的情绪が随所に表れていた。役に立たない古いしきたりをいつまでもしがみつくと劉の屈折した心理が投影されている。

王仁俊と劉岳雲の論調は19世紀末、20世紀の初頭、一部の官吏、知識人の共感を得たが、彼らの努力は結局徒勞であった。前述した嚴復の批判は、ちょうど彼らの急所を突いているし、彼らに共感を覚える人たちも、彼らのこのような中国の書物の記述を一々西洋の学問にこじつけて、「西学中源」説を立証しようとするやり方に賛成しなかった。

三

戊戌維新の期間中に「西学中原」説を鼓吹した最も影響力のある人物は実はやはり張之洞であった(彼の「中体西用」論がもっと人々に知られているが)。ただし、張之洞は王仁俊や劉岳雲のように洋学を一々中国のものにこじつける支離滅裂な「西学中源」説には賛成しない。彼は、中西の經典の「奥義」を比較することによって、「西学中原」の結論を得た。

『勸学編・外編』にある「会通」の中で、彼は『中庸』や『周易』、『周礼』そして『尚書』等の儒家經典の中から西洋の科学、化学、農学、林学、鉱学、商学、そして技術など西洋の科学技術と制度の大意を探しあてたと明言し、西洋の学術と制度はすべて中国經典の中から根拠を求めることができる。

彼は当時「西学中源」説を主張した2つの傾向を批判した。まず「西法の概略しか知らない者」は、「經典のいうところを取って、これをこじつけ、これらすべて中国学問にあると主張する。例えば、ただ借方根(ルート)は東洋からの方法と自慢するのに、算学を習わない。火器は元の太宗が西域を征伐した際に残したものだと言うが、銃砲の製造を重要視しない」という有様である。張氏は、彼らが自分を騙し、実際の問題が解決できないと切り捨てた。第2の傾向としては、「西法に溺れている者」である。かれらは「中西の学問をあげて

これをごね合わせ、中西に違いはないとした。例えば、『春秋』は即ち公法、孔教はキリスト教に合うという有様である。これは「人々の目をくらませ、その守るところを失わせる」と張氏は指摘している。彼の妙案は「西学中源」説と「中体西用」説を結びつけたことだ。こうすれば「西洋の政治制度、製造技術のうち、中国に利益をもたらし、聖人の教えを損なうものなら、古に証明できなくても、それを取り入れて構わない。まして經典に量り、根拠の明らかなものは言うまでもなかろう」と述べている。更に張氏は「中学は内学であって、洋学は外学である。中学は心身を治め、洋学は世間に対処する」、「新学は用となり、旧学は体となる」、体と用を兼備させるならば、西洋の学術と制度を導入すると同時に、中国の伝統も堅持することができるとしている²⁰。

張の主張は、頑固に古きを守る弊害を避けることができ、また時勢に応じて変化することもできるので、確かに彼が批判した2つの「西学中源」論より優れていた。張之洞が提唱した洋学は、西政（西洋の政治制度）と西芸（西洋の科学技術）の2つの側面がある。いわゆる西政は、学校、地理、計量、租税、律礼、勸工、通商などを含み、西芸とは算、絵、鉦、医、声、光、化、電などの自然科学を含む。自強運動の中で導入した洋学より範囲が拡大したと言える。日清戦争後、時局を救う1つの折衷案であり、急進的なものではなく、また保守的なものでもない。多くの人々にとって受け入れ可能な観点であった。したがって、『勸学篇』は、1898年百日維新の間に公開されてすぐ、光緒皇帝と西太后に「論は公正で物事に通じ、学術、人心に益するところが多い」と褒め称えられ、各省に広く刊行するよう命令した²¹。そうして、張之洞の「西学中源」説と「中体西用」説は、戊戌変法時期に最も広く伝わったものとなる。

しかし、『勸学篇』の目的の1つは、康有為・梁啓超ら維新派と違う立場を表明することにある。本の中で張は、康梁に対して、激しく攻撃していると同時に、道統と礼教を擁護しようとした。そのため、維新派の人たちは『勸学篇』を鋭く批判した。その西学の体用を分断させるやり方について、何啓と胡礼垣は「皮がなければ毛が付着するところもない」と譏られ、彼の「会通」論も「会も通もない」と揶揄された²²。しかし、張之洞の心づかいは我々が理解しなければならないところもある。『皇朝蓄艾文編』の編者、宝軒は何啓と胡礼垣の『勸学篇』書後を「優れた議論で、学問は中西を貫いている」と称えると同時に次のように指摘している。

『勸学篇』二十四篇は根気よく大いに苦心を重ねてある。今日、理解し発言できるのは張氏一人しかいない。その辛く言うに言えないことは、曾紀澤の『先睡後醒論』に勝っている。『書后』の各条の論は辛辣で、見解は偏っているが、これは時勢のことを思って発言したことである。『春秋』を引用し賢者を責める議論は遂に全書を否定してしまうことになった。読者はこのことを知らなくてはならない²³。

実際、維新派に対する最大の脅威はやはり頑固な保守勢力であった。張之洞は政治改革に関して維新派と大きな違いがあったが、洋学の導入問題については、康有為・梁啓超と多くの共通点がある。彼らはみな西洋を学ぶことを主張していた。この点について論じれば、彼の「中体西用」論は、維新運動の中でも進歩的な意義があったとすることができる。戊戌変法失敗後、維新運動の中で設立した新しい学校はほとんど閉鎖しなかったことは、張氏の主張に負うところが大きい。1901年以後、新しい学制の制定と普及、および科挙制度の廃止はいずれもこれを思想的基礎とした。例えば、張百熙は1902年『進呈学堂章程』という上奏文の中で新学校の設立は、「欧米日本諸国の成法を取り、我が中国二千余年の旧制を補足とするものである」と言っている。彼は同時に西洋の現行制度は「我中国が昔栄えていた頃の良き法とだいたい同じである」と述べている²⁴。20世紀初頭まで「西学中源」と「中体西用」論は、依然として洋学の輸入の補助になることができた。彼らは中国経学を弁護する時さえも、このような発想を踏襲した。たとえば、張百熙、榮慶、張之洞が制定した『学務綱要』（1904年）の中で、彼らも「西国は古学を保存することを重んじる」を理由として挙げ、新学校に経学課程を設立すべきであると弁護をした。彼らは「古学の最も宝であるものは経書である。知識のない者は新しきを好み古きをさげすみ、かつて気ままを楽しみ謹慎することを嫌う。ただ経書が廃棄されないことだけを恐れ、洋学を知らないものである」と批判している²⁵。しかし、この時、張之洞およびその「中体西用」と「西学中源」論はともに革命者の批判する対象となった。

四

「西学中源」説と「中体西用」論は、張之洞の『勸学篇』で頂点を極めた。同時に終焉を迎えることに至った。2つの説はともに19、20世紀の変わり目に一時的に流行したが、すぐに時代遅れとなった。西太后が西安で変法を宣言し、洋学が中国に導入することは逆らえない歴史的流れとなった。怒濤のように入ってくる西洋の学問の前に、「西学中源」説をすでにくい止めようがなく、「中体西用」説もまた例えば嚴復が『致外交報主人書』で批判したように内在的な矛盾が存在し、つじつまが合わなくなった。ちょうどこの時、西洋の学問のためにその名称を正す動きが表れた。これはまず洋学の1つである「科学」の名称問題として取り上げられていた。

西洋の科学が初めて中国に入った明末清初の際、明末学者はかつてこれを「格物の学」、或いは「格致の学」と訳し、「格物」「格致」と略称した。19世紀に西洋の科学が再び伝わってきた時、これらの訳名は依然としてそのまま用いられた。しかし19世紀末期、「格物」という名称は、非常に「西学中源」と関連されがちであった。「格物」は、中国固有の概念である故に、西洋の科学は中国固有のものだと誤解する人もいた。1903年8月9日、有名な思

思想家章太炎は『国民日日報』で「維新の二文字を用いるでたらめについて論ずる」の一文を発表し、このような時代遅れの議論に対して、鋭い批判を行った。彼は次のように指摘している。

新しい学問が次々と起こり、名称を新たに付け、あるいは『詩』『書』から語を取ってその名とすることもあるが、名義が似ているだけで内容はまったく顧みない。……その最もあざ笑うべきものは「格致」という二文字である。「格致」とはなんぞや。日本では物理学という。一部の見識のない人は『礼記・大学』に「格物致知」の語があることを見るが、鄭玄の旧注と司馬光、王陽明の諸論の意味するところはまったく知らない。朱熹に「事物の理を徹底的に窮める」とあるだけを見て、これを本の意味と勘違いしている。たとえ朱熹の言葉を借りたとしても竹を研究することは格物ではなく、ただ名をむやみに用いているだけで、真偽を混同させる。甚だしきは、西洋の声学、光学、電気学、化学、有機学、無機学などの学問はみな中国昔からあると考える。これは名称によって事実を間違えた例である²⁶。

この時、「西学中源」説はもはや誰も顧みなくなった。「中体西用」論に至っては張之洞があくまで主張し、一部の人が追随したが、立憲と革命の流れの中で勢力は次第に弱まった。このような形勢の下でこの2つ思潮は当時の革命者に葬り去られ、続いて革命を正統とする歴史学の批判を受けた。2つの思潮の一定の歴史時期における進歩的な意味合いも人々に無視されるようになった。

学術と思想の伝播・交流は1つの複雑な文化的事象である。中国における西洋科学の伝播に対する歴史的研究は、最近2、30年来、中外の学术界において広く重要視されてきた。しかし、「イエズス会士が西洋の科学を中国に伝えた」とか「プロテスタントの宣教師は近代科学を中国に伝えた」といった見方は依然として幅を利かしている。これらの長い間続いてきた言説は一定の程度において歴史事実の一部を反映しているが、さらに多くの重要な事実を覆い隠しているかもしれない。このような歴史観のもとで、中国伝統の学術と思想は往々にして中国人の歴史のお荷物で、西洋科学導入の障碍であり得も、積極的に作用する要素であり得なかったと考えられてきた。しかし現在このような捉え方に対して、人々は疑問を投げかけ始めた。というのは、伝統と近代化は決していつも対立するものではなく、中国伝統思想と学術も外来文化を取り入れる際、依拠とした思想、文化の資源の1つだからである。清末の「西学中源」説と「中体西用」論の盛衰は、1つの例証として、中国のような古い文明を持つ国が外来の文化を取り入れる際、歩んできた独特な道りを反映している。

注と文献

- 1 全漢昇「清末的西学源出中国説」『嶺南学報』1935年第3期、江晚原「試論清代‘西学中源’説」『自然科学史研究』1988年第2期、丁偉志、陳松『中西体用之間——晩清中西文化觀述論』中国社会科学出版社1995年
- 2 丁偉志、陳松的『在中西体用之間』は1つ例外と言える。
- 3 李之藻『天主実義重刻序』、徐宗沢『明清間耶穌会士訳著提要』147頁、中華書局1989年
- 4 康熙帝が「西学中源」を奨励する時代背景、及びその詳細について、拙論「康熙、梅文鼎和‘西学中源’説」『伝統文化與現代化』1995年第3期、「‘西学中源’説在明清之間の由来及其演變」『大陸雜誌』第90卷第6期(1995年6月)台北を参照。
- 5 丁偉志、陳松『中西体用之間——晩清中西文化觀述論』143-154頁、中国社会科学出版社1995年
- 6 全漢昇の前引用文を参照。
- 7 樊洪業『耶穌会士与中国科学』232-238頁、中国人民大学出版社1992年
- 8 王重民編『徐光啓集』第374-375頁、上海古籍出版社1984年
- 9 『清実録』第6册(『聖祖仁皇帝実録』卷二五八)552頁、中華書局1982年
- 10 馮桂芬「采西学議」、引自鄭振鐸『晚清文選』第105頁、上海書店1987年
- 11 陳旭麓「論“中体西用”」『陳旭麓學術文存』第274-280頁、上海人民出版社1990年
- 13 『薛福成選集』556頁、上海人民出版社1987年
- 13 「与『外交報』主人書」『嚴復集』第3册第558-559頁、中華書局1986年
- 14 王韜編『格致課芸彙編』卷四、上海書局石印本1897年
- 15 王韜『弢園西学輯存』弢園自刊本1890年
- 16 『嚴復集』第1册52-52頁、中華書局1986年
- 17 『格致古微』林頤山「叙」、俞樾「叙」、胡玉縉「跋」、吳鼎王氏自刊本1896年
- 18 「江標輯」と署名している『格致精華録』の内容は『格致古微』と完全に一致している。但し近代学科に基づく分類がなされ、検索の便が図られている。巻頭の張之洞の序文は、實際上『格致古微』巻末にある原著者王仁俊の識語である。これによって本書は江標の著作ではなく、書商が改竄したものと断定できる。
- 19 章棧『清故資政大夫紹興府知府劉公墓志銘』、『清代碑伝全集』上海古籍出版社1988年
- 20 『張文襄公全集』卷二零三、『勸学篇・外篇』中国書店1990年影印本
- 21 『勸学篇』書首載「上論」
- 22 何啓、胡礼垣『『勸学篇』書后』、于宝軒編『皇朝蓄艾文編』卷七第34-35頁、上海官書局1903年参照
- 23 于宝軒編『皇朝蓄艾文編』卷七、第52-53頁、上海官書局1903年
- 24 陳学恂主編『中国近代教育史教学参考資料』上册第527頁、北京：人民教育出版社1986年
- 25 同上第536頁
- 26 湯志鈞『章太炎政論選集』上、242-243頁、中華書局1977年。